

猫 蓑 通 信

第 83号
平成 23年
(2011年)
4月 15日発行
(年 4回発行)

意思の疎通

青木秀樹

地球物理学者としての寺田寅彦氏は「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を残されたが、阪神淡路大震災から十六年、中越大地震、スマトラ沖大地震と津波の被害からさほど時が経たず、忘れてもいないこの時期に、マグニチュード9・0の東日本大震災が起きた。この災害の状況についてはすでに多くが報道されているが、派生して起きた津波を合わせて未曾有の被害をもたらし、二次災害としての原子力発電所の問題はまた先行き不明だ。亡くなった方々とそのご家族に深く哀悼の意を表するとともに、被災された方々の生活再建、国民の安全と安心の再建の一日も早からんことを祈る。

のまじめな通訳論。通訳は発言者と聞き手の意思疎通を図ることが仕事である。発言者の言葉に忠実に訳すことが基本だが、発言者と聞き手の間には言語だけでなく、文化や生活環境の違いがあり、これが意思疎通を阻害するという。聞き手に発言者の意思を伝えるために時として意識することも必要になる。同時通訳で発言者の言葉をどう訳すか、そのためには短期の記憶が頼りである。その際の発言内容の覚えやすい要素として七か条が上げられている。

- 1 意味のあるもの
- 2 関心のあるもの
- 3 理解したもの
- 4 論理的なもの
- 5 物語性のあるもの
- 6 リズム感のあるもの（五七五など）
- 7 イメージしやすいもの（一枚の絵になるもの）

これを見て、私は連句の作者と読者の関係、また連句の前句と付句の関係と同じだと思った。前句を見定めて付句を考えるときの要素がこの七か条にある。

それにしても東明雅先生は速吟であっても意味・イメージのわかりやすい句を作られた。

●目次●

第百十六回 猫蓑会例会 初懐紙歌仙十巻	2
時事句は一卷に二、二句まで	東明雅 7
世態人情諷交詩	東明雅 7
「世態人情諷交詩」再論	東明雅 8
蕉風俳論抄	9
3・11の猫たち 帰宅難民体験聞き書き	10
ころも連句会のこと	稲垣渥子 12
連句にいれてよ	式田恭子 14
温故知新 5…日本書紀天皇和称に見る「転じ」	15
事務局たより	16

河を挟んでポストンの街 郁子
雪舟も歌麿も居る美術館 明雅
馴染の店で鱈酒に酔ひ 雅子
（二十韻『鈴虫の』 武井雅子撰）
などはわかりやすさのひとつの例であろう。
覚えやすく記憶にすつと入る句は連衆の共感を得やすく、よい付句を呼び、付合いが活発化する。逆に、どう付いているのかわからない句、転じの意識が先走る付かない句、言葉足らずで意味不明の句などが採用されると、連衆は付句に悩む。進行を停滞させ、一座の興をそぐことになる。連衆は付筋が明らかで付味のよい句を作るように心掛け、捌き手は付かない句を採らないように修練を積むことで、私たちは連句をより楽しむことができると思う。

1・屠蘇の座

歌仙「緩やかなワルツ」 坂本孝子 捌

緩やかなワルツよ幸くニューイヤー 孝子
 淑気漲るマーブルの階 冬乃
 特急券東を目指す列車にて 良重
 空模様から会話始まる 有子
 下町の公民館の居待月 曉巳
 さやかに並ぶ算盤の珠 乃
 こいさんの横顔美しき秋祭 有
 つつころばしの忍ぶ門口 巳
 蠟燭を吹き消す息を塞がれて 重
 イコンを描く修道の日々 乃
 舟を曳く母なる大河黒々と 巳
 送電止めてまねく紛争 有
 香片茶シラネいたたく昼の月涼し 重
 ふと気がつけば膝に斑猫 巳
 サブカルチャー歴史に耐へて路地の奥 重
 小沢昭一いまだ現役 乃
 きふ暮れけふ暮れあすも花の旅 同
 遠山映ししゃぼん玉とぶ 有
 ナオ 文豪の塚のほとりに畑を打つ 巳
 雨の降る日はメール三昧 有
 切り分けしチーズきれいに放射状 同
 車椅子には愛犬の添ひ 乃
 張替へる襖の下の懸想文 有

御神渡おみわた馳す君来べき夜は
 白鳥の湖より姫を救はねば
 善意を贈る伊達の何某
 声色に往年の艶紙芝居

湯屋の壁には富士の大景
 ジョギングは月の城下を一周し
 稲刈り給ふ長靴を召し

ナウ 鏡抜き香も迸る今年酒
 箆で掬つてこぼす法案

ポケットの何処かで着信音が呼ぶ
 デイレクター出す親指のキュー

花舞へる古都のみ寺の夢違
 かぎろひ立てる若草の丘

連衆 百武冬乃 伊藤良重 佐々木有子
 島村曉巳

2・年酒の座

歌仙「御慶」 橘文字 捌

初夢や先づ師に御慶申しける 文字
 二日の空に有明の月 守男
 露の臺あくび小さく顔出して 洋子
 縁に仔猫を抱く少年 節子
 強さうな合戦風絵描きあげ 實
 新型TV下取りが利く 霞
 岸壁は母の故郷日本海 男
 噂の主は人魚姫かも 洋
 黒き瞳と紅き唇蠱惑的 霞

愛の褥は何処にでも在る
 月天心円形劇場照らしをり
 松虫鈴虫螽斯鳴く

そぞろ寒司書の抱へる革表紙
 システイーナ堂僧衣揺らして
 石窯でミステリアスなピザを焼き
 栞代りに挟む伝票

この一瞬火花職人体張る
 江戸風鈴のそよりとませず
 ナオ 地下鉄駅上り下りが判らずに
 遠近両用眼鏡曲者

他人様のモバゲー画面気にかかり
 落ちた財布は側溝の底

お神籤を引き直しても中吉で
 九州場所に通ふ毎日

もつ鍋屋触れ合った指悔いの元
 メビウスの輪に入り込んだ恋

ポケットに何でもあるよドラえもん
 たった独りでめざす新党

公邸の住人を射る月の弓
 餌付けの小鳥けふもお出まし

ナウ 今年酒香佳し美しと挙げる盃
 健康体操寺の境内

匿名の善意広がりうねる波
 ランドセルにはA4判も

山向かう銘木爛漫花の村
 弦楽合奏流れ麗らか

連衆 近藤守男 大島洋子 長坂節子
 梅田實 高塚霞

愛の褥は何処にでも在る 同
 月天心円形劇場照らしをり 同
 松虫鈴虫螽斯鳴く 實
 そぞろ寒司書の抱へる革表紙 霞
 システイーナ堂僧衣揺らして 節
 石窯でミステリアスなピザを焼き 洋
 栞代りに挟む伝票 霞
 この一瞬火花職人体張る 洋
 江戸風鈴のそよりとませず 霞
 ナオ 地下鉄駅上り下りが判らずに 洋
 遠近両用眼鏡曲者 霞
 他人様のモバゲー画面気にかかり 節
 落ちた財布は側溝の底 實
 お神籤を引き直しても中吉で 洋
 九州場所に通ふ毎日 霞
 もつ鍋屋触れ合った指悔いの元 節
 メビウスの輪に入り込んだ恋 節
 ポケットに何でもあるよドラえもん 洋
 たった独りでめざす新党 實
 公邸の住人を射る月の弓 同
 餌付けの小鳥けふもお出まし 洋
 ナウ 今年酒香佳し美しと挙げる盃 實
 健康体操寺の境内 節
 匿名の善意広がりうねる波 同
 ランドセルにはA4判も 霞
 山向かう銘木爛漫花の村 文
 弦楽合奏流れ麗らか 實

3・福茶の座

歌仙「古稀の顔」

青木秀樹 捌

初鏡髭の白きも古稀の顔

秀樹

雑煮の餅はこんがり焼く

瞳

定期便はるか離島をつながらん

雅子

お国言葉で交す挨拶

昭

学帽の徽章は月の光受け

千恵子

糸のころ草はあちこちを向き

雅

神鹿の角切り行事哀れなる

昭

押へつけければ妬心なほ燃え

千

細々と想ひを綴る巴里の街

雅

恐怖とともにひらく金利差

瞳

増税はタバコをやめるきつかけに

昭

午睡の夢は故郷の火の山

雅

中天に昼月淡き夏野原

昭

もやもや病の治療病棟

千

スマートフォン指一本で事が足り

雅

流行りのものをとりあへず買ふ

瞳

墨堤の花を見下す電波塔

雅

出開帳には集ふ群衆

千

ナオ 清明の龍馬の像に思ひはせ

昭

片言めいて蘭学を読む

千

嫁ぎ先代々医師の家系にて

瞳

灯台の下いつも真暗

雅

のっそりと黒毛和牛の動き出し

樹

平成二十三年一月十六日

於 ホテルフロラシオン青山

自販機探し選ぶ爛酒

納豆汁喰うて離れぬ仲となり

老人ホーム恋のさまさま

同

あの頃の「青い山脈」LPで

昭

国内旅行予約満杯

瞳

南北の線の向かうも同じ月

同

尾越の鴨を湖に数へる

昭

ナウ 蜂の仔を好きと嫌ひの小競り合ひ

雅

紙きりの芸あごを振りつつ

千

カルチャーで勘亭流の書を習ふ

同

子どもの声の消えた町中

雅

神殿に迷ひ入りたる花一片

樹

乗込鮒の釣果万歳

昭

連衆 北爪 瞳 武井雅子 松原 昭

鈴木千恵子

4・雑煮の座

歌仙「万祝の」

本屋良子 捌

万祝の半纏まとふ出初式

良子

頭の声に淑気満ち満ち

泉子

露味嘈に三代の味伝へきて

遊民

雲居にまぎれ引いてゆく鳥

佳之子

山々に囲まれる町月おぼろ

鄭和

鈴を鳴らしてはしやぐ幼ら

民

古代史の公開講座に誘はれて

之

愛用さるる大活字本

泉

小さなビキニで行かうカレドニア

和

着衣のマハの方が好きなの
ご挨拶ですとお尻をひと撫です

尾を振る犬が生涯の友

和

月の舟スカイツリーを渡りゆき

之

夜長の窓にチェンバロの曲

民

百年の孤独かみしめ古酒の盃

泉

芥川賞夢のまた夢

之

揚花火スターマインの咲き乱れ

民

すててこ姿妻は咎める

和

ナオ 駅前の新聞売の白き息

泉

羽ふくらませ寒雀たち

之

世直しは誰の技なるランドセル

民

プロレス好きのギャルがいつばい

和

御息所聞怨の眉ふるはせて

之

瀬音聞こゆる六条の伽

和

段ボールハウスに液晶テレビ置き

良

吟遊詩人けふも帰らず

民

倫敦塔血糊で記すその生涯

泉

正統といふ馬の名を継ぎ

和

月浴びて揮毫の文字は知者不言

泉

強火遠火で炙るからすみ

之

ナウ 傘立に入らぬ秋の遍路杖

同

一休みする柚石の上

泉

夜をつぎてばやき続けるツイッター

民

野焼の煙踏切を越え

同

掌中の天目茶碗花無心

良

胡蝶の通ふ園を訪ねん

和

連衆 青木泉子 内田遊民 染谷佳之子

高山鄭和

5・喰積の座

歌仙「謡初」 式田恭子 捌

謡初まつ連吟の大広間 恭子
 小粋な帯で春着きりりと 吉文
 麗らかな歩道に鳩の舞ひ降りて 一枝
 母に教はる路味噌の味 志世子
 朧月うからやからの写真会 政志
 改札口の青年の笑み 世
 旅プラン希望いつばい膨らみぬ 同
 またまたなつた隣同士に 枝
 冬ざれに待つて手渡す恋の文 吉
 森の小川に映る葉の影 同
 教会の鐘おごそかに鳴り響く 恭
 じつと見上げる椋鳥の群 志
 月明り目葉をさすひとのゐて 世
 やや寒の中開くバザール 吉
 ボスポラス行き交ふ船のきりもなし 枝
 通の珈琲黒砂糖入れ 吉
 遠花火明治生まれの祖母の村 枝
 簡單服にスニーカー履き 世
 ナオ 札幌へハンカチ王子デビュー見に 吉
 ざわめきの街風の吹き抜け 志
 山頂の鎮守の神は岩の陰 世
 宰相の眉だんだんに垂れ 志
 気の強き妻はモンゴル生まれにて 吉

馬上の君と凍つる草原 世
 搔卷の人の形に捨て置かれ 枝
 ごみは袋に丸く小さく 恭
 なに為すも老いのあけくれゆつたりと 世
 健康器具の溜まるベランダ 志
 ノクターン流れて窓に三日の月 吉
 美術の秋に入賞の盃 世
 ナウ 珍しと蜂の子飯をお代はりし 同
 地産地消をいつも唱へる 枝
 ずつしりと重き名刀取り出して 志
 元教師なる父とのどらか 吉
 かくれんぼ花から花へまた隠れ 恭
 黄蝶白蝶回る蒼空 志

連衆 永田吉文 西田一枝 秋山志世子
 峯田政志

6・押鮎の座

歌仙「砂あたたかし」 松本碧 捌

ひざまづく砂あたたかし初苗 碧
 ちりりと鳴れる破魔弓の鈴 和代
 留学生乗合バスの席満ちて 曜子
 アニメの本を回し読むひと 明子
 詩難し苦吟かさねる月の下 豊美
 ふつと静まる庭の松虫 明
 菊人形菊師は姫をいつくしむ 和
 年代ワイン香り楽しむ 曜
 奔放に甘えてからむ六本木 碧

尖らせた口くちで塞いで 豊
 物陰に潜んでをりしパパラッチ 明
 見事に外す笹竹の易 和
 お旅所に氏子訪ぬる宵祭 曜
 近すぎる月汗を滲ませ 碧
 急斜面駆けるローラーコースター 豊
 善意の人は伊達直人なり 明
 花浴びて一年生は桜組 和
 働き蜂は行くよぶんぶん 曜
 ナオ 浮世絵の波のルーツは春の寺 碧
 傘すれ違ふ朝市の裏 豊
 耳にさす青鉛筆のちびてゐて 明
 週に三回廁当番 和
 厄落し曆ひもとき思案する 曜
 ご隠居さんだあの着膨れは 碧
 面影の反魂香に立つ姿 豊
 項の白さぞつとするほど 明
 サックスに迷ひこみたる恋の道 和
 どこまで伸びる高層のビル 碧
 満月の湾岸照らす佃島 曜
 M R I うそ寒の台 豊
 ナウ 案山子のみ若く元気な村を行く 明
 昼の賄ひ任されてをり 明
 繰り返し鸚鵡の語る物語 和
 唐渡りなる小さき梅瓶 明
 満開の花千態を写メールに 豊
 日永に開く競馬新聞 碧
 執筆 長崎和代 前田曜子 野口明子 高橋豊美

7・俵子の座
歌仙「時を酌む」 遠藤央子 捌

若水を酌む滔々たる時を酌む 央子
 盥の底に眠る俵子 士郎
 幅厚き両面彫の欄間にて 路子
 映画のシーン盛り上げるロケ 英子
 児等も来よ共に仰がん今日の月 美恵子
 ばざりと風にさわぐ芭蕉葉 士
 家並は影絵のごとく霧の奥 路
 恋の呪縛にこの身やつして 英
 よかにせどん招き入れたるワンルーム 士
 超高層はゆつくりと揺れ 英
 支持率に右顧左眈せず新組閣 央
 涼しい顔で側近を切る 士
 夏月をよぎるは宇宙船ならむ 路
 逆立ちをして地球支へる 路
 組体操魔法の笛で崩れたり 恵
 はや靴音に気付きたる犬 路
 あす越ゆる嶺をはるかに花の雲 同
 よもぎ新芽でつくるまんぢゆう 恵
 ナオゴビ砂漠隊商つつむ蟹楼かひやくら 士
 異郷の神に捧ぐ生贄 同
 願はくは暖衣飽食どの国も 英
 こちらでひとつみせる女子力 恵
 紐を決めこんで亭主の冬籠 士

平成二十三年一月十六日
 於 ホテルフロラシオン青山

醒めてよく見りやまあまあの顔 同
 鼻声の君は一入セクシーに 路
 多機能ケータイ使いこなせぬ 恵
 備忘録この〇印なんだつけ 央
 重箱の隅またも突つつく 英
 堂塔を切り裂くやうに月の鎌 士
 地虫の鳴いて涙ほろほろ 恵
 ナウ稲刈りは明日ときめて早寝する 路
 見た人に聞く七色の夢 士
 はや卒寿病知らずでうらやまれ 英
 衰へ見せぬカレーラスの声 同
 花に酔ひ花に疲れてまた楽し 央
 子雀遊ぶにぎやかな庭 恵

連衆 横井士郎 倉本路子 佐古英子
 武藤美恵子

8・螺肴にしきりの座
歌仙「青信号」 生田目常義 捌

帽脱げば淑気の風や青信号 常義
 成人の日の慣れぬ振袖 ゆみを
 一輪車くるり向き換へうららかに 淳子
 はうれん草は胡麻和へが好き 三実
 歌へない歌詞はラララで朧月 アンズ
 思はぬ繁昌ヨガの教室 淳
 間違へたふりしてねだる再指導 淳
 均等法です飯も当番 淳
 むく犬は特別席のソファを占め ア

鑑定団に出したタリの絵 三
 吊り下げたやうな満月見つめつつ 三
 かりんの酒を仕込む曾祖母 淳
 生垣に鶯の早贄揺れてをり 淳
 悪戯鬼たちとキヤッチボールす 三
 文末にタイガーマスクとありまして 三
 分別ごみのちらし広告 淳
 花早き南の国へ移り住み 淳
 沖永良部に春潮を聞く ア
 ナオ馬刀貝のひとつ探るたびはしやぎをり 淳
 久方ぶりの同窓会なり 三
 丁半も噂ばかりの純情派 淳
 餅肌むっちりさらす諸肌 淳
 汗しとどやとコクツた愛してる 同
 畜生道に救ひ覚えて 同
 夢違観音堂へ喜捨少し ア
 村の眠りに雪の深々 同
 竹馬に太郎次郎の競ふらん 義
 一斗の酒に和韻詠ひて 義
 誰彼となく呼び合ひて月の宴 淳
 鳥の渡りに皆縁に出る 義
 ナウ秋場所は外国人が優勝し 三
 地上波テレビつひにデジタル 義
 若瀬宜の長き祝詞に足しげ 淳
 兄の後追ふ幼な児の声 淳
 いくたびも曲がれど尽きぬ花小路 義
 珍しき蝶求め生涯 淳

連衆 青島ゆみを 上月淳子 滝沢三実
 松島アンズ

9・田作の座

歌仙「寒晴や」 山本要子 捌

寒晴や富士の裾野の海に入り 要子

早もほころぶ梅の一枝 久美子

染茶碗ゆっくり回す掌に 了斎

料理番組聞き流しつつ 敦子

月影のさらさら落ちる砂時計 わこ

踊稽古に集ふ人々 斎

爽やかに決意断捨離果すべく 久

ブランドバッグちよつと繕ふ わ

モトカレと出会ふ素っぴん口惜しき 斎

言はず飲み込む軽い悪態 わ

みちのくの有機栽培盛んにて 敦

遷都の話いつのまに消え 久

夏月を仰ぎつつ泣く遣唐使 斎

働き蟻は我のごとくか わ

就活は早すぎますよ遅らせて 久

飼育係の取り換へる藁 敦

イケメンのジャンプステップ花の下 同

マリンバ流る陽炎の中 要

種時いて進む研究宇宙船 久

厚くて丸い眼鏡ぐるぐる 斎

もてはやす棟方志功の包み紙 わ

甘党にして辛党であり 久

あやまちを酒と女でくりかへす 斎

信仰に似る胸乳への愛

景品の猫型湯たんぼ奪ひ合ふ

下がり続けるドル無惨なり

エコカーとスローライフを旨として

里の姫の秘伝膏薬

高台寺御霊屋に月そそぎ入る

藻塩ふりかけ衣被盛る

鳩首して猪道ふさぐ長談義

世界に向けてブログつぶやく

占ひは夢とばかりにうたがって

逆さにしても同じ絵の札

花筏ゆるやかに橋くぐり抜け

ひよいと斜めに乗せた春帽

敦

要

わ

敦

斎

わ

敦

要

わ

敦

要

わ

敦

要

わ

敦

要

わ

敦

10・若菜の座
歌仙「詩神」

棚町未悠 捌

そちこちに詩神おり来る初懐紙 未悠

四方の春とて祝詞交換 千町

ようそろとサイドミラーを開きぬて 鐵男

高速道に遠き街騒 鐵男

幼児にほらののさまと教へをり 町

刈った庭木をざつくりと結び 鐵

着心地のよき藍染の秋袷 同

口説き上手に少しゆらめく 同

このごろはメイクも爪もしてもらひ 同

ひたすら長い王宮の廊 同

町

大臣はかつて馬賊の親分で

觀光客は元の国から

あぢさみをスイッチバックで行く電車

湖に碎ける梅雨晴れの月

修道院蔵の葡萄酒積み出す

水琴窟の音に聞き入る

豪商の往時をしのぶ門と花

春挽糸引く故郷の母

ナオ丘に寝て国のまほろば八重霞

ためつすがめつ木簡を読む

「はやぶさ」の宇宙みやげが期待され

なほ銃声のひびく地のあり

夜ごと夜ごと狐火我を招きたる

馬棟すりこむ悴んだ指

ちよつと恐い三白眼が好きになり

媚薬も作る薬剤師とか

御兩人パワースポット礼参り

トップモードでお財布はから

清貧の意地を通すと誓ふ月

生姜市にて生姜囃む友

ナウ柳散る運河の先は海に入り

引き猫のみ店に客なし

古い閑居鉛筆いつも尖らせて

口ついで出る論語講釈

江姫のお転婆笑ふ花の山

ゆるき流れにかぎろへる橋

同

同

同

同

同

同

連衆 原田千町 林 鐵男 須賀敬子

平成二十三年一月十六日
於 ホテルフロラシオン青山

時事句は一卷に一、二句まで
三つ四つはおぞましい

東明雅

平成七（一九九五）年四月十五日発行

『猫養通信』第十九号より転載

質問コーナー

【Q】時事の句ということが言われますが、連句一卷の中でこのような付句の意義、又どのようなことに気を付けて考えればいいのかをお教えください。

【A】近世の俳諧には時事の句というものはない。戦前の連句にもすくなかったようである。『俳諧独稽古』（一八二八成）には、作品中に詠んではならないものを列挙して、

慎めよ怪異乱世に火事罪科天災不順不孝不忠義

に忌
近代の貴人の御名官名も夫と知れるは句の上

に忌
四民とも今居る人の名を出さず家々の秘事我家の業

とあるが、こんな遠慮がゆるんだのは、戦後の民衆の意識の変化によるものであろう。

近世においては、時の政治、世情を批判することは許されなかった。これを犯したものが筆禍に遭った例は枚挙に遑がない。近代になって

も、その名残があつて、それが全く払拭されたのは、戦後天皇が人間であることを宣言されて以後のことである。俳諧と連句の違いがはっきりとするとところである。

だから時事の句が現代連句に詠まれるということは、昔の俳諧には欠けていた素材の一つが復活したことを通して、現代の連句がより自由になり、漸く近代的になったことの一つの証拠であろう。

また、時事の句は、その存在によって、一座が興行された時代、あるいは年次までもその作品の中に残すことになる。これは一座の人の連衆心を強めるものであろうし、また、その作品を鑑賞する人に取っても、何よりの手がかりになるところであろう。

ただ、それだけに、たとえば、歌仙一卷の中に時事の句が三つも四つも入ってくるとまる

世態人情諷交詩

東明雅

平成九（一九九七）年七月十五日発行

『猫養通信』第二十八号より転載

昭和初期、高浜虚子によって唱えられた花鳥諷諭論は、爾後ホトトギス派の俳句の根本理念となり、また、これに対抗する新興俳句運動を引きおこす契機ともなり、相俟って今日の俳句

で、電車の中で週刊誌の中吊り広告を読んでいるようなおぞましい感じを否定できない。それは一句の中に作者の感情がこもる余白がなく、生硬でこなれていない句が多いからであろう。

さらに言えば、時事の句として一卷の中に取り上げる題材は、十年経っても二十年経っても、世人から忘れられないようなものであつて欲しい。一二年ですつかり忘れられるようなものは連衆の共感もすくないであろうし、鑑賞する側にとつても迷惑である。

私は時事の句を必ず一卷に一つ詠めと言っているわけではない。前句に即した時事の句が出たら出してもよいというわけで、わざわざ時事の句を出す為に苦勞をすることはないと思う。また、時事の句はやはり歌仙一卷に一つ、あるいはそれに関連して出してせいぜい二句ぐらいで止めるようにしたいと思う。

全盛時代を招来した。

花鳥諷諭とは、「花鳥諷諭と申しますのは、花鳥風月を諷諭するということで、一層細密に言えば、春夏秋冬四時の移り変りに依つて起る自然界の現象、並びにそれを伴ふ人事界の現象を諷諭するの謂であります」（「虚子句集」自序）と虚子自身が言っている通り、その中に人事界の諸現象も含んでいるのであるけれども、それはあく迄四時の移り変わりによっておこるもので、主体は自然界の現象であり、月・雪・

花その他、自然の風物を詠むという事であり、この詠み方の背後に写生説がある事も周知の通りである。

右に倣って私は現代連句の根本理念を考えたのであるが、これには芭蕉の俳諧における根本理念を再吟味することから入るのが捷徑であろう。私が正岡子規の連俳非文学論を読んで納得出来なかったのは、その前に、芭蕉の俳諧、ことに「冬の日」・「猿蓑」・「炭俵」の名作を数々読み、感動していたからで、このような作品をもつ俳諧が、どうして文学であり得ないのか、私は未だに分からないのである。

ここでは「猿蓑」の中の「市中は」の巻を取りあげ、その根本理念を探ってみよう。

ご承知の通り、この作品は発句以下、市中の雑踏から田園へ、そして山間僻地へと情景が推移し、その中に市民・農民・旅人など、さまざまな生活が描かれている。裏に入ると柔媚な恋の句と暗鬱な述懐の句が交錯し、変化に富んだ

「世態人情諷交詩」再論

東明雅

平成十四（二〇〇二）年一月十五日発行

『猫蓑通信』第四十六号より転載

私は平成九年の七月「ねこみの通信」第二十八号に「世態人情諷交詩」という論文を書いて、私の考えている連句の根本原理とし、連

人世の種々相が描かれる。名残の表になると、小市民の貧しい生活の相が続くが、折端近くになって、隠者の風狂の生活に変わり、名残の裏の王朝古典の世界に続いて有名な「浮世の果は皆小町なり」の絶唱となる。三十六句の中、純粹な自然描写もないではないが、それは四、五句に過ぎず、それらも、前句の会釈、あるいは通句に用いられる場合が多い。

このように、俳諧は叙景より抒情が中心で、さまざまな庶民の実態を描いているが、また、未摘花・西行・小町などを面影にした句もあって、要するに人の世の虚実を連衆が詠みあい、付け合っているものである。

「芭蕉翁附合集評註」という本の中で、佐野石兮が「すべて俳諧は第一人情世態にわたらざれば、あはれなる事をかき事をいひ出づる事かたし」と言っているが、その通り、俳諧とは人世の虚実（世態・人情）にあはれとをかしを見出して詠み、その句にまた付句をし合うもの

衆の方に対しては、機会ある毎に敷衍、説明して来た。しかし、五年の歳月を経た今日になっても、未だ大方の理解を得られず、十分な反応もない。これについては、私自身としても反省することが多いので、もう一度、意のあるところを述べてみたい。

まず、「世態人情諷交詩」がひろく理解されなかったのは、その作品例を掲出せず、元禄三年芭蕉捌きの「市中は」の巻を例として出して

なのである。俳諧は発句を除けばあとはみな付句である。その付句はみな人世の虚実を描くのであるから、写生だけでは間にあわず、想像力あるいは創作力を重視しなければならないのは当然であろう。虚実の論はすでに談林俳諧の時代から登場し、蕉風俳諧にも継承され、発展した。これを体系化したのが各務支考で、表現における虚の尊重を説いている。

私は俳諧の根本理念を右のように考え、「世態人情諷交詩」とした。あるいは「人世の虚実諷交詩」と言ってもよい。

そして、この理念は芭蕉の俳諧の伝統をうけている現代連句の根本理念としても、過不足のないものと考ええる。

冒頭にも述べたように、花鳥諷詠論の提唱、及びそれに対抗する新興俳句の勃興が、現代俳句を隆昌に導いたように、私の「世態人情諷交詩」論が、現代連句界に一石を投ずる事になれば幸いである。

説明したためであろう。もちろん芭蕉の俳諧はすばらしいけれども、それをそのまま現代連句の模範とするのは、やはり不適當であった。それ故、ここでは思い切って現代連句の例を出すことにする。

短歌行「秋晴や」

秋晴や城を挿頭の金華山

明雅

3・11の猫たち

帰宅難民体験聞き書き

東日本大震災の被災者の皆様にご心よりお見舞いを申し上げます。

首都圏在住の猫養会員も、三月十一日の当日は、帰宅の足を奪われるなど様々な体験を余儀なくされました。天災、人災、様々なことを改めて考えさせられる機会でもあったように思います。会員からの聞き書きによって、その体験の一部を記してみました。(文責・編集部)

●都心の小学校に泊まる

本屋良子さんは、主宰する「ラピロス連句会」の月例会で、中央区兜町の新場橋区民館三階にいた。四人ずつ二卓に別れた同座四人のうち、良子さんともう一人は戦争体験者、他の二人は戦後生まれ。最初の揺れが来たとき、頑丈そうな鉄筋の建物なので安心して心配せずその場を動かなかったが、戦後派二人は向かいの公園に逃げ、しばらく木にしがみついて過ごす。

テレビがあったので被災地の状況もわかり、首都圏の交通が止まったこともわかって帰宅をあきらめる。夕方六時、区民館には泊められないということ、避難所になった向かいの区立阪本小学校に移り、八人の連衆のうち残った四人が会議室に泊まる。すぐに保存用の水、毛布が配られ、仲間で夕食と朝食の食料品を調達、

一晚を過ごす準備が整った。余震が続く中、新たに歌仙を起首し、寝るまでに巻き上げる。

「発句に震災のことを出すのは失礼だからやめよう」と相談し、関係のない手持ちの発句を立句にした。自分が直接体験したのでもなく、切実に感じ、考えたのでもないことを、報道等を通じて知っただけで安易に発句や俳句に、また平句の時事句にするのはどうか、特に災害等で当事者があるときにはなおさら、よく考える必要があると思う。

歌仙「飛鳥路の」の巻 膝送り衆議判

飛鳥路の紫雲英の原や日もすがら 秋扇

四股踏みながら穴出づる墓 明日伽

開店のおまけ風船子らの手に 桂

ほつとひと息貰くゆらす 良子

稜線の色を濃くして月の舟 伽

松茸飯の匂ひ漂ふ 扇

生甲斐の木彫搬入美術展 良

節くれ立ちし指に包帯 桂

震度五に糟糠の妻すがり付き 扇

嘘をつきつき送る歳月 伽

振り込んで汗もしとどの賭け麻雀 桂

故郷の野に夏の霜置く 良

蔵印鋺職人の技の冴え 伽

蛇皮線奏で黒潮の唄 扇

あまみきよ降りたつ島に茜さす 良

けふも元気にラジオ体操 桂

花旋風隠れん坊の鬼攫ふ 扇

おたまじやくしの尻尾なくなり
ナオふらここを漕ぎて未来を掴まんと

洗ひ晒しの縞の綿シャツ 良

広場へとデモ隊数万人の声 伽

独裁者なり父も岳父も 扇

色里に入り浸りたる一生にて 良

忘れられない初恋の影 桂

告白の残る壁あり小学校 扇

浮世の風に揺れるコスモス 伽

望の月追ひかけ夜間飛行便 良

雁は来たるか酒は足りるか 桂

化学式六角形の繋がりに 伽

借りた手袋人のあたたか 良

ナウクリスマスキャンドル点す聖歌隊 扇

ビーフシチューに眼鏡曇らせ 桂

蛇口より水道水の旨きこと 良

北窓開く丘の図書館 伽

みちのくの花の若木に夢乗せて 良

復興の槌ひびけ春空 桂

平成二十三年三月十一日 首尾

於 東京都中央区立阪本小学校

翌朝七時半に避難所を出て帰路につく。逗子の自宅まで四時間近くかかった。途中、道路も電車も人で溢れていたが、みな黙々と整然と行動し、日本人が守礼の民であることを実感。

●徒歩で横浜へ帰る

新大久保の俳句文学館では、猫養会関連の月

例会のひとつ「吉野の会」が開催中。多くの方が帰宅に難渋する結果になった。本震の後すぐに帰宅をめざした方も、巻き上げてしまおうとしばしとどまった方もいるが、ほどなく、全員退館して下さいということになり、結局どの座も巻き上げらず中断。

おそらく最も長距離を歩く結果になったのは生田日常義さん。四時頃に文学館を出て、ほぼ山手線ぞいに新宿から渋谷へ。ここまで約一時間。いつも使う交通機関の東横線を目安に、横浜市港南区の自宅をめざす。道が線路に沿っているわけではないので、駒沢通り、目黒通りなどを經由して次々の駅をめざして進む。

碑文谷で夕食に入った食堂のテレビで、東京・小田原間は新幹線が動いていることを知る。山手線伝いに品川へ行って新幹線を利用したほうがよかった（新大久保から渋谷までと、渋谷から品川まではほぼ等距離）と思うが、あらためて品川に向かうにはもう遠い。そのまま都立大、自由が丘、田園調布と東横線に沿って進み、丸子橋で多摩川を渡る。日吉、綱島と經由して、夜十一時過ぎに新横浜に着く。

港北区役所に泊まれることがわかったが、途中やっと奥様と携帯で連絡がとれたので、新横浜駅近くの交差点を目印に、車で迎えに来てもらう。ところが渋滞で時間がかかることもあり、お互い不案内な場所でもあり、やっと奥様と出会えたのが十二時半、寒い屋外に一時間以上立ちつくす結果になった。そこから大渋滞で、帰宅できたのは深夜二時半頃。疲労が回復する

までに、その後数日かかった。

●池袋駅で一晩過ごす

東武東上線沿線、小川町にお住まいの百武冬乃さんは、山手線を逆方向に歩きはじめ、六時半頃に池袋駅に着く。その先は全く足がない。池袋から小川町までは直線距離にして渋谷から横浜までの二倍以上あり、歩いて帰るのは問題外。電車が動き出す朝まで、駅の地下階段に座って夜明かしとなった。JRはシャッターを下ろして構内から人を締め出してしまったらしいが、東武線側の地下街には入ることができた。結婚式帰りの礼装の一団、卒業式後らしい、和服に袴のお嬢さんなどもある。それにくらべれば平服の自分は気楽。居心地のいい場所に席を占めていても、少しでも座をはずすと他の人に占領されてしまうが、全体として殺気立つようなことは何もなく、みな穏やかで親切。

明け方に、地下街の食べ物屋さんらしき、そろいの法被を着た一団が、熱い味噌汁の炊き出しを周辺の人々にふるまってくれる。朝六時半に電車が動き出し、ゆっくりの各駅運行で小川町まで二時間かかって帰った。

●復旧した電車で町田へ帰る

小田急線沿線の町田にお住まいの橘文子さんと長崎和代さんは、文学館からずっと行動を共にした。連れ立って新宿駅まで歩く。まずは小田急デパート地下食品売場で弁当を確保。これは好判断で、デパートはすぐ閉店してしまっ

し、以後は食糧入手が難しかったと思う。新宿駅地下広場にしばらくいる間に、京都在住の文子さんのお嬢さんとやっと携帯がつながる。押上在住のお嬢さんの知人のところで泊めてもらったら、という案が出たが、知らないお宅に泊まるなんて申し訳ない、と和代さんが反対。JR寄りの側は締め出されるし、地下広場は夜明かしには向かなそう。何とかしてくれるかもしれないと東京都庁へ行ってみる。かつて連句教室で通い慣れた朝日カルチャーセンターのある、新宿住友ビルの少し先だ。

都庁ロビーでは段ボールと毛布が配られ、一段落したので先程の弁当で腹ごしらえ。余震が続く中、深夜になって小田急線が復旧との報が届き、再度新宿駅に向かう。一時少し前の電車に乗り、約一時間かかって町田着。まずは駅にほどちかい和代さんのお宅に向かい、文子さんはそこから車で送ってもらう。翌日になって、押上の知人宅は留守だったことがわかった。やはり行かなくて正解だったのだ。

二人とも戦争体験者だ。文子さんは、空襲から逃げるとき、目の前を行く人の頭が焼夷弾直撃で飛ばされる、などの経験がある。それにくらべればたいしたことではなかった、と冷静。確な判断で行動できたのもそのためだろう。

●何事もなく帰る

初動のわずかの差が、後で大きく響く。同じく「吉野の会」に出席していた坂本孝子さんは、すぐに車で三鷹の自宅へ。激しい渋滞はまだ始

まらず、いつも通りにすんなり帰着できた。翌日はまだ交通機関は不順ながら、講師をつとめる新宿朝日カルチャーセンター連句教室を平常通り朝十時から開講。出席者は普段よりやや少なめだったが、皆でいつも通りの実習を行った。

●回送タクシーで帰る

倉本路子さんは当日は連句ではなく、国立劇場で歌舞伎を観劇するために外出、JR中央線四谷駅で姪御さんと待ち合わせ中に揺れが来た。待ち合わせ場所で一時間半待ったが、結局姪御さんとは会えぬまま。

普段ならいざ知らず、病み上がりでもあるので、下落合の自宅まで同じ新宿区内とはいえず歩いて帰るのはさすがに無理。タクシーを探す

ころも連句会のこと

稲垣渥子



ころも連句会の発足は一九七八年。それまで連句を自宅で遊んでいた数人の仲間が、東京の東明雅先生に教えを乞うたのである。以後、先生の御指導の下、愛知県豊田市を拠点に現代連句を遊び、学んできた。

毎月の例会は、桜花学園大学五二三講義室、第四火曜日午前十一時～午後五時である。

初期の頃は、メンバーが上京して関口芭蕉庵の連句会の座で先生や先輩の教えを受けたとの

が、次々来るのは「回送」表示で乗れないものばかり。しかし見ず知らずの人達がみな年寄りを気遣って親切にしてくれる。

そうした手助けもあり、回送タクシーの一台になんとか乗せてもらうことができた。普段ならすぐ着く距離だが、大渋滞で下落合まで三時間かかる。途中、おぼつかない足どりで同方向へ歩いていたらお爺さんを一人、運転手にたのんで相乗りさせてあげる。その後練馬まで帰ったはず。どのくらい時間がかかっただろうか。

路子さんは戦前、朝鮮にお住まい。ご自身は終戦前に帰国したので、いわゆる引き揚げ者にはならずすんだが、女学校同級の友人たちはほとんどが引き揚げのすさまじい苦労を余儀なくされた。運良く内地へ帰り着いても無一物か

こと。やがて明雅先生は奥様と共に豊田市へおいでになり、そこで「ころも連句会」の命名もしていただいた。それは自動車の町豊田市の前身が挙母市であることに由来する。

巻き終わった一巻をお送りすると、添削のお手紙を直ぐに送り返して下さった明雅先生の万年筆の、青いインクの文字は今も大切な思い出である。カタカナの打越について「カタカナについては、ころもは若いだから自分たちでルールを作りなさい。」と仰って下さったこともあった。

三十年前、ころもは確かに若かった！
でも、「厳しい伝統連句に鍛えられつつ、ピ

らの再スタート。若い人はそこからまた頑張れたが、年とった人達は本当に気の毒だった。今回の震災で当時のことをまざまざと思い出す。いまは当時とは社会状況もちがうので、被災した方々は若い人だけでなく、年取った人もなんとか頑張つてほしいと思う。

筆者も仕事中に帰宅難民化した一人。人々は整然と、暗黙の連帯感を確かめ合うよう行動していたが、それにしても路上の人の数はあまりに多い。まるでラッシュアワーの駅のような個所さえある。直下型地震でビル倒壊、火事などに道を塞がれていたらどうなるか。子供の頃に親から繰り返し聞いた、関東大震災や東京大空襲の話が、久々に生々しく思い出された。

ビッドに『今』に取り組む』という、ころもの目指すものはずっと変わっていない。

例会に集まるメンバーは代表の矢崎藍さんを始め十八名。卒寿を過ぎてなおお元気で、皆出席に近い敏女さんを筆頭に、四十代、三十代まで、各世代にまたがって賑やかである。その上、藍ゼミの学生さんも、時々是我々の連句の座に加わって耳慣れぬ新語を披露してくれる。発足時からのメンバーは少なくなつたが、新聞連載コラム「付けてみませんか」の投句常連だった方、連句講座の受講者など、皆さん連句が楽しく、このころもに縁をもったことを大切に思う

と言われる。そして、表六句が終わって持参の弁当を開くときには、漬物談義など和やかな語らいのひとつもあって、充実した楽しい例会になった。時々は若い人から「それ古いなあ」と言われつつも、若い感性を持ち続けたいというのほころもに参加する皆の気持ちである。

例会で巻いているのは伝統的な歌仙を始め、表合せ八句、半歌仙、二十韻、明雅忌には源心などと、時に応じて様々。また、全員が一泊して一気に巻く百韻も今までに二巻あるが、そろそろまた巻きたいという声が出ているところである。明雅先生に教えて頂いた伝統連句の式目を基底に置きながら、時々は冒険も試みたりしている。初心者が入ってきた時は、授業向けに考案した連句ROCKや連句14も巻く。

でも、ここしばらくは歌仙を丁寧に巻きたいということから、午後からだった開始時間を早めて、時間に余裕を持ってじっくりと巻いているところである。

ところで、ころも連句会の活動を振り返ってみると、その折々に猫蓑会の宗匠や会員の皆さんに助けていただきながら、多くのイベントを持つてきたことが思い浮かぶ。

古くは、明雅先生のご講演「芭蕉の恋句」をメインに、盛大な全国大会となった最初の「とよた連句まつり」には猫蓑会の重鎮、先輩方が勢揃いで応援に来て下さった。

その後「とよた連句まつり」は桜花学園大学

の学園祭で毎年行われ、一般人、学生、連句人の賑やかな交流の場となった。二〇〇三年には「すてきな三句」の全国募吟と実作大会も開き、このときスタートして、現在も続く「全国高校付け句コンクール」も、今年度は一万四千句の付け句を集めている。

その他、私の記憶に新しいところでは、故片山多迦夫先生の連句集「ベガサス」出版をお祝いして、猫蓑を始め四人の宗匠をお招きし、名古屋で連句会を開いたこと。姉妹連句会の竜神連句会・栄連句サロン・尋牛会・豊明連句会に呼び掛け、周辺の連句人や院生も加わって、充実したひと時となった。

そういえば、中国と日本の詩人や研究者と一緒に日中連句実作会・連句研究会を持って、暑い夏の日、旧東海道赤坂宿で汗をかけたことも。

以上、今までの活動を振り返りながら、ころも連句会の特色をあげてみた。これまでの活動の中で、我々は随分忙しい思いもしてきたが、結構楽しく充実した時を持っていったんだと思うし、色々な機会を与えられたことを、喜んでもいる。

最後にインターネットのこと。一九九九年HP「矢崎藍の連句ワールド」で開いたBBSの連句KUSARIであるが、三句の転じを確保した連句コミュニケーションの実験が今もなお続いて、今年中には十万句になる勢い。ころも連句会の活動には直接は関係ないというもの

の、主力メンバーやスタッフはころもの仲間なので、十万句達成の記念オフ会などまた忙しくなりそうである。

そして、ころも連句会は、これからも連句実作を大切にしながら、楽しい仲間と共に「今」の連句を追求していきたい。



桜花学園大学513
講義室での例会。



代表の矢崎藍さんを中心に、ころも連句会のメンバー。

温故知新

5…日本書紀天皇和称に見る「転じ」

●初期天皇の和称

『日本書紀』より 養老四(七二〇)年

- 1 神日本磐余彦 かむやまといはれびこ
- 2 神渟名川耳 かむゆななかはみみ
- 3 磯城津彦玉手看 いそぎつひこたまてみ
- 4 大日本彦相友 おほなほひこさへとも
- 5 觀松彦香殖稻 くわんしょうかあきぬ
- 6 日本足彦国押人 よめつひこくにおしひと
- 7 大日本根子彦太瓊 おほなほこひこひこたま
- 8 大日本根子彦国牽 おほなほこひこくにひこ
- 9 稚日本根子彦大日々 わかやまとねこひこひこ
- 10 御間城入彦五十瓊殖 みまきいりひこいそ
- 11 活目入彦五十狹茅 いくめいりひこいそ
- 12 大足彦忍代別 おほたらしひこおしあわけ
- 13 稚足彦 わかたらしひこ
- 14 足仲彦 たらしなかつひこ
- 15 誉田 ほむだ
- 16 大鷓鴣 おほさざぎ
- 17 去来穗別 いさほわけ
- 18 瑞齒別 みづはわけ
- 19 雄朝津間稚子宿禰 おしほつひこのすくぬ
- 20 六穂 あなほ
- 21 大泊瀬幼武 おほせわかたけ
- 22 白髮武広国押稚日本根子 しらがたけひろくにおしわかやまとねこ
- 23 弘計 ひろけ

- 24 億計 おひけ
- 25 小泊瀬稚鷓鴣 せせわかざぎ
- 26 男大迹 おほおし
- 27 武小広国押盾 たけひろくにおししたて
- 28 天国排開広庭 あめくにおしひろひろには
- 29 淳中倉太珠敷 ちんちゅうぐらたままき
- 30 橘豊日 たちばなのとよひ
- 31 泊瀬部 はつせべ
- 32 豊御食炊屋姫 とよみけかきやひめ
- 33 息長足日広額 おきなみたらしひひろぬか
- 34 天豊財重日足姫 あめとよからいかしひたらしひめ
- 35 天万豊日 あめよろつとよひ

解題●今回も八世紀初頭という古い資料から。右は、初代の神武天皇から第三十六代の孝徳天皇まで、『日本書紀』に記された歴代の和称。正式にはそれぞれの後に「天皇」(のすめらみこと)が付く。

記紀その他に見られる初期の天皇の和称は、長さ、形式、意味のどれをとつてもまったくまちまちだ。戦前は小学校教育で「神武、綏靖、安寧……」とすべて丸暗記したという歴代の漢字諡号は、漢字二字による形式上の一貫性を保っている。和称の極端な不統一はそれと対照的で余計に目立つ。

複数の王統があつたのを無理に統一的に記述した結果ではないか、など、このことについてはさまざまな解釈がなされている。それらの当否はこの考察の範囲外だが、もし後世の改竄や創作だったとしても、それならなおさら、もっと一貫性のある和称を考えたはずではないかと思う。

ここから先は「仮説」と呼ぶのもおこがましい筆

者の妄想だ。

平安朝の物語文学には、登場人物の「本名」というものがほとんど記されない。たとえば「光源氏」にしても「光の宮」とか「光の君」というのはただのニックネームで、人々はこのようなニックネームか、その時々役職名でしか呼ばれない。賜姓源氏の通則にしたがって「源光」が本名として想定されていたかもしれないが、そうでないかもしれない。終生のライバルだった「頭中将」にしても同じことで、その都度の役職名でしか呼ばれない。本名らしきもので登場するのは従者の惟光くらいか。

「兼家」とか「道長」とか、われわれが本名として知っている当時の実在の人物の名も、彼らの生前面と向かつてそのような呼ばれたことはほとんどなかったろうし、それすらも一種の公的な名にすぎず、私的な「本当の本名」は他にあつたのかもしれない。ましてや当時の女性の名前ほとんどは今日うかがい知ることができない。源氏の作者「紫式部」も、宮仕えのための、これもニックネームにすぎない。当時、言霊信仰の一部として、人の名はその人の魂と結びついているから、名を知ることのできかけたり、その人の運命を自由に左右することができると、という観念が一般的だった。男女ともに本名は深く秘すべきもので、仮に本名を知っていても人前であからさまにその名で呼んだりすべきものではなかった。個人情報保護法どころの話ではない。人名をめぐるところした呪術的世界観は、平安朝より溯った記紀編纂当時、あるいは天皇制初期の時代には、さらに強固なものがあつたろう。

天皇和称というものが、漢語の諡と同じく死後つけられたものなのか、それとも生前の「本名」だったのかもいまひとつはっきりしないが、伝えられた幼名と共通する要素を持つ和称もあり、いかにもよ

そよそしい漢字諡号よりははるかに、生きている本人に寄り添った名だったように思われる。

過去の天皇の和称が記紀にあるように公表されている以上、もしその命名に形式的、内容的な統一性一貫性や法則性があれば、先代までの和称を知ること、現に生きている当代（今上）の和称も容易に推測することができそう。死後に付けられる諡号ならともかく、人の名についての当時の観念からして、それではいかにもまずかろう。だから、その名は逆に一貫性や法則性を意図的に避け、次々に「転じ」なければならなかったのではないだろうか。

「転じ」ざるをえない要因、意図がそのようなものだったかどうかはともかく、その結果としての「不統一性」について、神聖な歴史を語る上で美意識上問題がある、というふうには当時考えられなかった。そのことだけは確かだ。だからこそこのような形で残っている。われわれの先祖はともと、漢字諡号に典型的に見られるような形式的整合性とは異なる種類の美意識を備えていたらしい。

このような底流が、漢詩や西洋詩に見られる構成的な美意識とは異質な、後世の連歌、連句の持つ一種独特の形式感覚、美意識につながっていると考えるのは我田引水に過ぎるだろうか。

よく見ると全くばらばらというわけでもなく、時折、ある程度の共通性を持つ名前がいくつか続いたり、しばらく間を置いて似た名前が再登場したりすることも。連歌、連句の流れと実によく似ている。「句数と去嫌」のなんらかのルールに従っているようにさえ見えて、興味が尽きない。試みに、歌仙の句数と同じ第三十六代までを列記してみた。

『古事記』よりも『日本書紀』のほうが文字を表意的に使い、名前の「意味」を推測する手がかりを多く含むので、『紀』の表記に従った。

(斎)

事務局だより

●第百十六回例会（初懐紙）が開催されました

一月十六日（日曜日）十二時より、ホテルフロラシオン青山にて、第百十六回猫蓑会例会（平成二十三年初懐紙）が開催されました。十卓に分れて歌仙実作が行われ、午後五時に閉会。当日の作品は今号の二ページから六ページに掲載されています。



●今後の予定

●第百十七回猫蓑会例会

四月二十一日（木）

十二時〜十七時（受付十二時より）

於 亀戸天神社

奉納正式俳諧興行の後、二十韻実作を行います。

●第二十回猫蓑同人会総会

六月十九日（日）

十二時〜十七時（受付十時半より）

於 新宿ワシントンホテル新館

同人会総会開催の後、歌仙実作を行います。

●第百十八回猫蓑会例会（平成二十三年度総会）

七月二十日（水）

十二時〜十七時（受付十時半より）

於 江東区芭蕉記念館

猫蓑総会開催の後、歌仙実作を行います。

●第百十九回猫蓑会例会 芭蕉忌・明雅忌

十月十九日（水）予定

正式俳諧興行の後、源心実作を行います。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

・伊勢原連句会様 平成二十三年一月 一万円

・山寺たつみ様 平成二十三年二月 五千円

・天の川連句会様 平成二十三年二月 六千円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●移転

・平林香織 岩手県盛岡市へ

●猫蓑会オフィシャルサイト

<http://nekomino.cool.ne.jp/>

サイト内の「書庫」のページで、『季刊連句』『猫蓑通信』の全バックナンバーを閲覧、ダウンロードできます。どうぞご利用下さい。

季刊 『猫蓑通信』第八十三号

平成二十三年四月十五日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社